



特別  
千 12  
3643  
48



高砂抄

高砂

け薩ハ世阿弥云述作と

相生信原本号也高砂本と云及の如て後

紀河原信原本勸進能記長安本勸進聖鞍馬寺

寛正五年

尾一の巻

高き砂しおでしつめして今程

妻の播く志に足より又播きの高

山の思ふめく砂つりてよと

後撰集河をたぬはく乃信酒とるあり

宗性法師

梅若誠印  
四和堂主  
梅若堂印  
寄贈

山守ハいさハいさ高き砂の尾に橋ありてか

高の砂を流し遍信信心かくさるる也乃信ハ法師

信人とし山守ハいさハいさ高き砂の尾に橋ありてか

高き砂播きの名もあれとすて山といさ高き砂一洗

おのこハ尾とこいさぬい流の大意ハ肥後國阿蘇

の言れ津をな成と京の岸小高砂一洗のよの系信

せしきさるに信いさ高き砂の松れ精丈時と

現もおおまね松の溜とけり住者めし待たると海士

海士板の厨焼  
作ハるハ

のむねにのりてゆり侍りのな成とまうり侍者  
備て指奇拍とんぬりてあり

ぬけ高砂海月お及お来と一句の志をさす  
故に百番れ巻頭として天子 將軍様といふ  
缺剛の禮とたはを職としておぬき御事又  
じぶぬ御事也

今と略の振衣信光本本文目もはくのかのトナルミテ行末にハレ

何まの儀めしお申の文句らあてにあらざり  
是の只振のころり神の振衣にいひも有ぬに

振衣ひもころり 今と略といひて久  
とあるはれり一初ての振衣のころり  
ころり振衣といふは来久ぬ月日とぬりか  
ひまの振衣にぬり 或日日本にころり字根  
本の假字と云 け儀の發音に今と云はる振衣  
れい字を以て音と發とを寄ゆの作言あり  
と云 伊集諾言 伊集開言 伊集二字、又母  
ころり儀、又いろは、四十八字、易、八卦、初、乾、字  
和州、いぬいと儀、乾、是、陰陽、五行、總司、万物

論語集注第四  
子曰參乎吾  
道一以貫之曾子  
曰唯

本也故周易以乾剛卷初トス 其後有云  
今日と始とふるはと今日と始とるはけ意味の  
より秘訣こそ 日にも未と久と表向  
な成ゆめこの後の日數れかあるに今も  
内ふらふれ 御代を祝へとも

神代卷日伊弉諾伊弉冉尊トモニ議テ曰ク吾  
ステニ大八洲國及山川草木ヲ生リ何ノ天下主  
タルモノヲ生ガレヤト共ニ日ノ神ヲ生マワリマス  
大日靈貴ト申ス一書ニ曰ク天照太神一書ニ曰ク天照太  
神

日靈尊此子光華明彩シテ六合ノ内ニ照徹  
故ニ神ニ喜ビテ曰ク吾息多アリトイヘトモ未  
如此靈異兒ハアラス宣ク久ク此國ニ留マフル  
ベカラス自當ニ早ク天ニ送マワリテ授ニ天上ノ  
事ヲ以スヘシ是時ニ天地相去コトイマダ遠カ  
ラス故天柱ヲ以天上ニオツリアグト云云  
按ニ陰陽ノ二神國ノ主タルヘキ御子ヲ生セ給  
ト願玉テ生マス御神則日ノ神ニテマシマス是日  
本ノ最初ノ天君也地神五代第一ノ御神也第





肥前肥後を分ちて比とハ向後を菅州國天  
皇國ハ各別をわく國造と定まるとぬ。肥後肥前  
と分て當時右の三國を肥後肥前加へ古の國号  
海の國と名ると分せり 海國 古名 景行天皇十八年三月  
帝。筑紫を定めりすと四月熊縣 熊縣 郡 小て熊津  
赤と征伐し海に流れり海路を絶て。菅州の小海  
小海り海も同月菅州より記ふめすと火がわたり  
海に日られて春ふつととわづりし時。遠火の  
先とらと傳やと名につかりと火のえちと回つと

ふ知火の前とてと  
火前  
後とてと大後と云

八代の縣を村と云ふ。彼火と名海に火と名せり  
りのわづりしりハと國と名分と火の國と云。是せり  
ふ不知火あり。と後國去地肥前。故に肥後肥前と云  
わつととこれより又記とせり。むら郡長次飯赤の溪  
小名せ海ひふ。棹人物捨んと云者。是と名て帝  
に名る。是飯赤の御贄の控興あり。は六月十六日  
向後にわり海に。向後は古向後海媛わつて  
帝にまるとは。健甕龍命 健甕龍命 神武帝ノ孫 八井耳ノ命子 草部比賣命  
健甕 龍夫人 の買めて。今の向後大神あり。は所帝健甕

肥前集よみ人よみ  
いふりとの指せり  
とて二杯のわ  
りれとあ。向後の  
御やろ



大宮司アルハ

伊勢 鹿嶋 宇佐

河嶺

伊勢ハ  
フ、宮司トトナフ

龍の孫惟人用遠速勝に命せしむ。社を建祭祀

と目らむ。あはれ大宮司是よりゆる。神胤を留む

代に二位に任す。然れは後より神主ありし。

大宮司と神主ハ各別也。大宮司ノ方ハ系ノ通字

惟人ノ子孫故ハ推テ通字ハ別カノ也

故通字ハノ字ハ別カ

又もた次ハ。按及高砂の浦と一見也。心静マのり。信光本トテハ別カトアリ長後本同

松の精ハありしと云ふ也。按歴と云ハ説あり

神和皇后三韓征伐ハ河上時ハ海の色と通ハ

小霧の晴ハ向ハいふんハ有ハ。あはれ海の色と

又皇后御裳のほころびたるハ針と糸の糸と

さきより流ハあはれハ計るこふ。又凡去記殘篇ハ

圓の形容張るのこふ。因てさきよりあはれと云

あり。或日計同と申説と云。又凡去記の説ハ

危し一見ハ一説也。高砂浦古也

松の浦ハ高砂の浦と云ハ故のナリ

松の浦ハ高砂の浦と云ハ故のナリ

早蕨集

花を収ふんかて

賀茂成保

高砂の尾ふれ梅をたぬまにいぼふかぬかちりあす

梅衣束を脱ぐの如路とく今日さひひの浦の

浪松路長閑さ言れもくつさぬらん跡来とご白

信本元唐本春風のいふまにんあとも長後本同

雲のくちとらとさひく播磨ささき砂の浦ふ

若れまのりく

高砂との砂甲の解くさるくささ遠のよめささき

夜さるぬあれいひひたりささきささきささき

空をさる遠方あれいぬささきささきささき

いふも衣の浪借く松路のさげさ春れこい長閑さ

春のささきふひ侍あり 春日中ぬらふ海

まのこい向換とせいのあいくつあぬらこさ

郷の海ふあり又跡来と遠くさ梅衣束

いふも志む侍あり

新古今和歌集

卷第廿

法橋春元

梅衣束を脱ぐの如路とく今日さひひの浦の

浪松路長閑さ言れもくつさぬらん跡来とご白

雲のくちとらとさひく播磨ささき砂の浦ふ

よ花河のつゝ湯のまにいさく道にぬかつゝ  
あしにさかたてしきの花河あまのまにさし  
こころちたつ。まことし來らしむたに  
んはし。 ~~船歌~~ 船歌はまにさし  
まのまにさし。 ~~船歌~~ 船歌はまにさし  
くは河あり

舟歌

舟歌

人こころいさくとあまのまにさし  
又さしあまのまにさし。 ~~舟歌~~ 舟歌はまにさし

又さしあまのまにさし。 ~~舟歌~~ 舟歌はまにさし  
又さしあまのまにさし。 ~~舟歌~~ 舟歌はまにさし  
又さしあまのまにさし。 ~~舟歌~~ 舟歌はまにさし

後撰集 舟歌

舟歌

人こころいさくとあまのまにさし  
右さしあまのまにさし。 ~~舟歌~~ 舟歌はまにさし  
こころいさくとあまのまにさし。 ~~舟歌~~ 舟歌はまにさし  
あまのまにさし。 ~~舟歌~~ 舟歌はまにさし  
事あつた。 ~~舟歌~~ 舟歌はまにさし

あかき遠き境の海をめぐりてはるばるふかき  
ぬくぬく朝倉返りてまじり申す遠くの借  
二つあり申す是は陽のまじりてまじりて  
のまじりてまじりて海は陽和合は  
いふまじりてまじりて

<sup>二</sup>言砂の松は春風吹れて尾との録も響きあり  
故に松の松は春風吹れて尾との録も響きあり

松の精は洞ありて木のありてまじりて  
の松乃春風吹きてまじりて

てまじりてまじりて  
同感とありてまじりて  
夕の松の松は春風吹れて尾との録も響きあり  
はるばるふかき  
ぬくぬく朝倉返りてまじり申す遠く  
の借二つあり申す是は陽のまじりて  
まじりて海は陽和合は

拾遺

壬生おん

尾の松の松は春風吹れて尾との録も響きあり  
故に松の松は春風吹れて尾との録も響きあり

世々白鳥の棲りて老の病の病に  
る明の春の暮夜の起后の松に  
いとなと菅菫のさひとのさるなり

古今雜言

藤原真凡

惟とわしる人よせし言のたし言はなれり  
けあらは白鳥のさびしにありてさゆの松ありて  
首のわが。された家なめくかされがひりて老て  
なれりかげとて言なときたふりあり真凡を  
れめといひのびたるらと今後なるあり

下しの河つらたぬになちてことさうりるさ  
とこの春の世とちの言をくさの縁はめ  
情のこことづげらう世とつりる老人とて  
病の年久なちたれを人ふたふ縁とちの  
ゆとさむをさしあゆもふゆも縁は縁に  
あるとさしてらりるの春の暮夜と月影と  
とんるさの夜れあけの詩めしゆり  
風吹枯木晴天雨 月照平沙麦夜霜  
あはれとあはれは縁とけりるねとこのこ

白樂天

常注在叶ふ松凡と因う〜のこころの道あり  
ふとをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ

果竹葉

いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ

下

音信の松ふらふ浦凡の落葉夜れ神信へみ流の  
らひぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ

いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ  
いよぬらふをいすら遠といを人にながれいよぬらふ

後撰集 林中

後撰集 林中

秋の夜は月の影いと木の葉より落葉夜れ身はうつり

又藤垣草卷十八下長落葉衣の目あり  
落葉衣の中アイウエラカキクエ通月の名なれり  
く衣れ事也目出及又向なれり朽と云と婦てかく  
書る處一くら落葉の文並山流木定云れ記云表ハ  
ぬと記く黄の織物なりううう黄文の半箱とあり  
按は流に紅と黄とだくぬこの織物なりハ松の葉  
葉いろ成る

<sup>上</sup>布ら言何のく尾上のねと年ありて老の波も  
うららむや本の下隠れ落葉かあるまじ命あり

ておいつまへまものねとれもいなるもとく

古今雜

村中人也

かいつ世とむつこも何の尾よたたるねありあ  
力の老るもと云く年積りてハ西志いしすと  
むのぬもふと云く 羽衣小 諺解九卷  
廿一丁アリ  
木公望カ之遇周文滑瀆之波疊面

此事兼取一巻呂望非能條下委アリ

又落葉ハかおなれりかかぬと云かけたるも是  
久なれり一ふれ又いつ中もとくとのねとハ筑

前のごきん入なるもの

拾遺集

携倚本

いづれか一冊の松葉と回りたれぬ人かたの答

後拾遺

有本為正

いづれか一冊の松葉と回りたれぬ人かたの答

曰

相模

いづれか一冊の松葉と回りたれぬ人かたの答

いづれか一冊の松葉と回りたれぬ人かたの答

いづれか一冊の松葉と回りたれぬ人かたの答

口平 元廣本此文与無之信光本同之長俊本同

里人とおぼすに老人夫婦ありて小之成

老人小之成と事のい

信光本 老人此方の事なりけり行幸の時なり 長俊本同

いづれか一冊の松葉と回りたれぬ人かたの答

いづれか一冊の松葉と回りたれぬ人かたの答

信光本 此所よとてトアララシキニテナス

いづれか一冊の松葉と回りたれぬ人かたの答

いづれか一冊の松葉と回りたれぬ人かたの答

いづれか一冊の松葉と回りたれぬ人かたの答









又大尉廷尉皆武官ノ名下略 官職備考曰  
大尉一人相當從六位上 小尉一人相當正七位上ナリ  
諸太史源平重代ノ侍殊ニ其品ヲ擇テ是ニ任セラル  
後鳥羽院ノ時和田小太郎義盛左衛門尉ニ任スル類  
ナリ下略 尉と老人の号と異なるを以て之を以て  
乞書写のお遠からず尉當小史小史云々  
長光の祿 丈小補韻會曰 養韻雉兩切周制  
以八寸為尺十尺為丈人長八尺謂之丈夫又易  
丈人吉注陸云嚴莊之兒 鄭云能以法度長於人  
ヲテカマシム

前疏廣傳宜從 丈人所勸師古曰 嚴莊之稱故親  
而老者皆稱焉淮南子云 丈人老而杖於人不以 點  
俗作丈非徐氏筆精云 丈人尊嚴之稱  
王充論衡云人形以丈為正故名 男子為丈  
夫尊翁 嫗為丈人一  
海の國は海國の攝津國云々  
ふ之故老傳云天探女神天磐船ニリテ此國ニ攝  
タル高津ノ号ヲ取テ攝津國ト稱ス亦漢書云攝  
然而天下安云々寧彙云 攝靜謐也云々兩義相共

要津ノ連続ニ取テ大上國トス。天下多事此の津也。  
石小徳の津港カウ撮スレテ此の言めし物カウはと云。又言は  
と云ハ天照太神の御孫也。津カウ候の地也。及に言  
高津と云。物カウは云凡死又恒言とい明神神功皇  
后小豆苗母すといの國あり。おに海も水と神物  
有しよりおれること

天あ元年の比文徳天皇恒言小豆苗あり。小豆苗  
大破小乃小豆苗の内より明神のり也

分林は枝 奥義抄 秋物候

夜やとれ夜やといとけしはのり合乃國ありおむま

部カウ

け神源よりて即時に遺言ありとい

風雅七秋

後言

恒言れ神乃むまの候きとんて浦よりと月カウ

又本集秋ス

後成

片とれやまのりといおむふゆりてさる白菊の花

續後拾遺はのむれ也

かね内侍

つとむらこのこらう津のまらうてしと無海とい

新後撰集九

後京抄拾遺

おたふおわつてと津のまら無海とい

又是成晚といふことば言何の人西の人か  
知る事ハ中々通とあり通言ハ中々通  
ゆゑと云はれハ老人のまゝ一西にるあつた遠さ  
何の言何の浦山國と歸してとていふ事成  
事ハ免

なぬぶがくたのり候体入

老人といふハ禮記曲禮曰人生十年ヲ日幼學二十ヲ  
日弱冠三十ヲ日壯有室四十ヲ日強而仕五十ヲ日艾  
版官政六十ヲ日耆指使七十ヲ日老而傳八十九十ヲ

日老七年日悼悼與老雖有罪不加刑百年  
日期頤モシキル 細とい七十歳より老人と云り

江のこのはゆや山川萬里と隔つきたたかひ小  
通ふらつ江のこのはゆや山川萬里と隔つきたたかひ小の妹背乃道江のこのはゆや山川萬里と隔つきたたかひ小ををかた

うたこのはゆやといハ一系解周語作飲林良枝小  
わゆりにと云ふとわり

吳竹葉モシキル云々とい同わゆりといふ事ハ  
とてと云ふわゆりたごてと云通

教るといふこと梅の花といふ白ひの神モシキル

くさくさそめくさ深くはなうらふらふらふらふら  
三月のふたにみゆき湯もみまうとみまうとみまうと  
万葉集<sup>ウメテ</sup>薄情<sup>ウメテ</sup>のり  
古事記<sup>ウメテ</sup>宇多<sup>ウメテ</sup>感<sup>ウメテ</sup>物<sup>ウメテ</sup>云<sup>ウメテ</sup>王子<sup>ウメテ</sup>故<sup>ウメテ</sup>應<sup>ウメテ</sup>慎<sup>ウメテ</sup>  
萬葉集卷廿二丁うたてまうふい云河  
勝茂也あぬるふれく云河く又うたてく云河  
もろく又云只大がうたてく云河く又うたてく云河  
あれたげおのうたてく万葉集薄情<sup>ウメテ</sup>の河の合  
るくく

いりせの乃く又あゆの送あり山川万里と隔ちた  
あぬあゆふ中にをくくくくくくくくくくくく

古事記部 巻抽 後へへへへ

別記アリ

なうれては蝶背の山のあゆまをわくくのくくくく  
河海抄ふ云紀伊國小島山<sup>サカ</sup>の山くくくくくくくく  
満てりくくくくくくくくくくくくくくくくく  
その前のみまゆの記伊豆のりく又萬治二年の春。飛井  
稚<sup>ウメテ</sup>章<sup>ウメテ</sup>堀<sup>ウメテ</sup>吉<sup>ウメテ</sup>登<sup>ウメテ</sup>くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

去登川ハ大わき  
珠山皆山ハ紀伊





友成のいふの如く一と一とを以て一と云ふは、  
とありて一と云ふは、一と云ふは、一と云ふは、

け書ゆは、徳性 善類 出中 汎 なれ ハ 五倫 の内 乃 又 ぬ  
の事と云ふは、又 性 性 卷 苗 事 記 ナ 味 肯 変 者 也

中庸曰、君子之道造端乎夫婦及其至也察乎  
天地、け渚めし、下 心 を み て 去 る 者 あり 也 異 域 也

異域のけ、又 ぬ 互 相 成 り 情 の 切 な れ ハ 遠  
しと云ふは、い は り と あり

或云、扱 不 に 非 精 又 作 偽 子 の わ ら り 非 情 也

精 固 正 也 好 也 真 氣 也 熟 也 的 也  
精 專 也 靈 也

論語、食 不 厭 精 又 強 也 明 也

善 也 タ マ エ ラ ブ カ ヤ ク ヒ ト 也  
釋 也 水 精 也 晴 同

精 庚 コ ロ ナ サ ケ エ ト ハ リ マ ト 思 意 也

董仲舒曰、人欲之、謂情又理也。孟子、物之不齊、  
物之情也。論語、上好信、則民莫敢不用情、  
又實也。

心るを、松 た め お し と 云 て 高 松 の ゆ き し る  
わり、い て 人 の と を い り 又 ぬ ハ 人 な れ る

人の事ふかして答ふる。松流たにけ年ま  
おまはえぬるおとこわつらふおまはえぬる  
松の精ありこころたえぬは人なる事と  
いひ出た文藝あり

<sup>信</sup> 謂とさげし面白おとされに因つる相生の松  
乃物語と<sup>長</sup>おにひい<sup>長</sup>ま<sup>長</sup>れ<sup>長</sup>な<sup>長</sup>さ<sup>長</sup>り

<sup>信</sup> 是に首より云かいつせらるるいふれりて又向り  
首乃人の中へは是は先うたさ世乃いふめしあり  
信本本代のたうしはまらけしと  
長本本たうとあり

<sup>信</sup> 此のいふる代乃万葉集はいふ一のい

又ぬく首のい傳とあはする  
百番板が古抄にげあ又向時代お遠けりて有抄に  
万葉集なる所の松とよめる言あり。又版に古抄小  
時代お遠と伝せりこころい

万葉集 拾遺抄に云お教四十三百十五首  
長お二百の中首 聖武天皇

御宇左大臣橘ノ諸兄公撰之 仙克抄云諸兄公  
死後大伴家持卿撰ひつと河小中古今抄或公云  
万葉集は聖武帝の御女孝謙帝に御時天平勝宝

五年井子の左大臣權徳元勅を請て撰と。一世に首尾  
口伝して、清和の廢帝、祿徳帝、光仁帝、桓武帝乃  
代るべく、平城帝此御時撰をりて、大同三年にせり  
流布と。古今集を名席、首平城天子御侍臣令撰  
万葉集、自尔以來時、歷十代、教過百年と書り  
萬葉集流布と後古今時代迄、平城治世、嵯峨治世  
淳和、仁明、文徳、清和、陽成、光孝、宇多、醍醐、在位  
の後九年合て十代年、百一年と。古今集、万葉集より  
百年斗後の撰と。万葉集、任者の言はれられた言砂の

分別、故小時代お遠と古砂、ちりこんぬ、い流化老の  
言とびく考らた言砂の松、古とる言と、いん為よ、代  
乃万葉集の古の言と、るぬ、一、既よ古今集に  
言砂の松と、い、此友と、ぬ、さるに、よみなき、万葉  
時代の言と、い、お遠、い、わ、したぬ、万葉集に、言砂の  
言と撰と、せるもの、こら、一、是、言砂の事、と、う、そ、乃、  
い、言、合、あり

<sup>之、河</sup>  
任者、こ、中、ハ、今、昔、御、代、に、任、所、ハ、延、喜、の、御、事、  
<sup>ワ、シ、ト</sup>  
松、と、ら、ら、ぬ、と、の、葉、也

任者、こ、中、ハ、今、昔、御、代、に、任、所、ハ、延、喜、の、御、事、  
の、言、又、こ、ハ、今、皇、六、年

盡俗尽

代硯礪天皇の四女と云ひて時代の年号延喜三年  
 の帝と云文は古樞一篇の眼骨は云々云々云々  
 ヤジヒミコト云々云々。元来友成の向ひて何れの松  
 ねえれ因なるとの義は松に云々松のいふまじふは  
 けも文義つひりめいたありは云々の答は。後若と  
 云ひ今に延喜帝の御事書にも一編の事は云々  
 かのついでに云々云々。後若れ代やと云別が云々  
 答と云ふは云々の云々云々。松と云々云々の事  
 子と云ふは代れと云ふは云々。古の帝は云々の

ちりううも云々云々。ついでに云々云々。ついでに  
 ねわと云々云々。ついでに云々云々。ついでに  
 万物を云々云々。ついでに云々云々。ついでに  
 け遠く云々云々。ついでに云々云々。ついでに  
 代と云々の心おわむ。注書有り。自伝云々。今御事

高  
 景

信史本右今ナリ  
 元康本カニニ人トアリ長後本同ニ上  
 景は古今おれけと御代とありはつた云々あり

け古今云々の事。ついでに云々。ついでに  
 いふと云々。御代と云々に云々。ついでに  
 只今の御代と

わつめよりして、**方葉集**時代の言代といし大平の  
民の御代とのたごあり

<sup>早</sup>終るもけハ有終や。今社ハ審春の目れ

本成會得ちしきる河にふあんとあつこえりけ  
老のやうく西の海の<sup>早</sup>わつハ位の<sup>早</sup>家ハ<sup>早</sup>砂  
松とらそ<sup>早</sup>春と<sup>早</sup>長用<sup>早</sup>小

春の目れ光わくこハ春の目乃あつやうめをいして。和  
光同塵の言とぬく終り 知者不言章第五十六  
老子經曰和其光同其塵<sup>早</sup>任<sup>早</sup>知<sup>早</sup>智<sup>早</sup>息<sup>早</sup>の光と塵

一 隠して<sup>早</sup>終る<sup>早</sup>終と<sup>早</sup>光と<sup>早</sup>世<sup>早</sup>小<sup>早</sup>隠<sup>早</sup>塵<sup>早</sup>信<sup>早</sup>の  
中<sup>早</sup>に<sup>早</sup>混<sup>早</sup>して<sup>早</sup>時<sup>早</sup>と<sup>早</sup>知<sup>早</sup>ると<sup>早</sup>同<sup>早</sup>塵<sup>早</sup>と<sup>早</sup>云<sup>早</sup>ハ<sup>早</sup>万<sup>早</sup>民<sup>早</sup>れ<sup>早</sup>分<sup>早</sup>の  
ら<sup>早</sup>く<sup>早</sup>あり<sup>早</sup>又<sup>早</sup>津<sup>早</sup>の<sup>早</sup>御<sup>早</sup>事<sup>早</sup>ハ<sup>早</sup>款<sup>早</sup>め<sup>早</sup>。

郭古今

善者信正

やうく<sup>早</sup>終<sup>早</sup>れ<sup>早</sup>と<sup>早</sup>塵<sup>早</sup>小<sup>早</sup>曇<sup>早</sup>り<sup>早</sup>分<sup>早</sup>と<sup>早</sup>な<sup>早</sup>れ<sup>早</sup>光<sup>早</sup>ハ<sup>早</sup>終<sup>早</sup>よ<sup>早</sup>す<sup>早</sup>の  
作者大相津出阮の女ハ日本記<sup>早</sup>心とヤ<sup>早</sup>とバ<sup>早</sup>び<sup>早</sup>う  
伴昇<sup>早</sup>信<sup>早</sup>言<sup>早</sup>日向<sup>早</sup>け<sup>早</sup>小<sup>早</sup>産<sup>早</sup>揚<sup>早</sup>の<sup>早</sup>穢<sup>早</sup>り<sup>早</sup>取<sup>早</sup>に<sup>早</sup>く<sup>早</sup>御<sup>早</sup>被<sup>早</sup>け  
泣<sup>早</sup>け<sup>早</sup>時<sup>早</sup>表<sup>早</sup>筒<sup>早</sup>男<sup>早</sup>中<sup>早</sup>筒<sup>早</sup>男<sup>早</sup>底<sup>早</sup>筒<sup>早</sup>男<sup>早</sup>と<sup>早</sup>て<sup>早</sup>あ<sup>早</sup>つ<sup>早</sup>れ  
給<sup>早</sup>け<sup>早</sup>是<sup>早</sup>即<sup>早</sup>信<sup>早</sup>者<sup>早</sup>と<sup>早</sup>を<sup>早</sup>終<sup>早</sup>め<sup>早</sup>て<sup>早</sup>伴<sup>早</sup>昇<sup>早</sup>信<sup>早</sup>言<sup>早</sup>心<sup>早</sup>化<sup>早</sup>

神也。神功皇后三韓を伐<sup>ウケテ</sup>治<sup>メ</sup>し時ハ倭<sup>ヤマト</sup>の王神  
以<sup>シテ</sup>松守復<sup>シ</sup>神<sup>ノ</sup>あり。新羅<sup>シラキ</sup>の王<sup>ノ</sup>也。其<sup>ノ</sup>時ハ  
の時今の津<sup>ノ</sup>此<sup>ノ</sup>倭<sup>ノ</sup>の里に宮<sup>ノ</sup>有<sup>リ</sup>。後<sup>ノ</sup>つ<sup>ラ</sup>ま<sup>シ</sup>  
より神<sup>ノ</sup>功<sup>ノ</sup>皇<sup>ノ</sup>后<sup>ノ</sup>も日<sup>ノ</sup>々<sup>ノ</sup>後<sup>ノ</sup>ひ<sup>ノ</sup>ありて倭<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>ハ四<sup>ノ</sup>百<sup>ノ</sup>を  
明<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>の元<sup>ノ</sup>ハ日<sup>ノ</sup>向<sup>ノ</sup>のわ<sup>ノ</sup>え<sup>ノ</sup>措<sup>ノ</sup>様<sup>ノ</sup>り<sup>ノ</sup>承<sup>ノ</sup>れ<sup>ノ</sup>た<sup>ノ</sup>。天下<sup>ノ</sup>此<sup>ノ</sup>若<sup>ノ</sup>  
れ津<sup>ノ</sup>あり倭<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>に<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>い<sup>ノ</sup>ふ<sup>ノ</sup>や<sup>ノ</sup>〜と<sup>ノ</sup>光<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>て<sup>ノ</sup>。万<sup>ノ</sup>民<sup>ノ</sup>の慶<sup>ノ</sup>ふ  
海<sup>ノ</sup>よりて倭<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>ハ倭<sup>ノ</sup>朝<sup>ノ</sup>の利益<sup>ノ</sup>を放<sup>ノ</sup>。倭<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>ハ松<sup>ノ</sup>木<sup>ノ</sup>と  
ふ感<sup>ノ</sup>光<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>ま<sup>ノ</sup>〜天下<sup>ノ</sup>静<sup>ノ</sup>謐<sup>ノ</sup>小<sup>ノ</sup>春<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>さ<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>ら<sup>ノ</sup>し<sup>ノ</sup>こと<sup>ノ</sup>  
<sup>上</sup>四<sup>ノ</sup>海<sup>ノ</sup>浪<sup>ノ</sup>静<sup>ノ</sup>め<sup>ノ</sup>く<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>ハ<sup>ノ</sup>治<sup>ノ</sup>る<sup>ノ</sup>時<sup>ノ</sup>津<sup>ノ</sup>比<sup>ノ</sup>技<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>か<sup>ノ</sup>ら<sup>ノ</sup>ぬ<sup>ノ</sup>御<sup>ノ</sup>代<sup>ノ</sup>

ふれや

新撰下學集曰。四海浪靜。此秋津洲ハ出現、  
離島ナリ。三國ト云<sup>ハ</sup>ト七。當朝<sup>ノ</sup>ヲ日<sup>ノ</sup>ニタト<sup>ハ</sup>テ。佛  
法流布<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>ナリ。四<sup>ノ</sup>魔<sup>ノ</sup>ノ<sup>ノ</sup>夷<sup>ノ</sup>ト<sup>テ</sup>四<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>ノ<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>ヨリ競<sup>ケ</sup>望<sup>シ</sup>ヲ  
成<sup>ス</sup>也。然<sup>ル</sup>ニ三十三年<sup>ノ</sup>ハ灑<sup>レ</sup>乱<sup>ノ</sup>嶽<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>浪<sup>ト</sup>立<sup>ナリ</sup>。君  
君タルトキハ四海<sup>ノ</sup>タ<sup>ス</sup>ト云<sup>ハ</sup>リ。釋<sup>ノ</sup>名<sup>ニ</sup>日<sup>ノ</sup>海<sup>ハ</sup>。晦<sup>也</sup>。主<sup>ニ</sup>承<sup>レ</sup>  
穢<sup>エ</sup>濁<sup>ダ</sup>。其<sup>ノ</sup>水<sup>ノ</sup>黒<sup>ク</sup>。如<sup>シ</sup>晦<sup>也</sup>。  
四海<sup>ノ</sup>ハ日本<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>四<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>ハ海<sup>ニ</sup>。海<sup>ノ</sup>ハより<sup>テ</sup>收<sup>メ</sup>静<sup>ム</sup>と云<sup>ハ</sup>る。  
收<sup>メ</sup>静<sup>ム</sup>と<sup>ハ</sup>天下<sup>ノ</sup>太平<sup>ノ</sup>と<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>受<sup>メ</sup>。時<sup>ノ</sup>津<sup>ノ</sup>比<sup>ノ</sup>と<sup>ハ</sup>時<sup>ノ</sup>と<sup>ハ</sup>た<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>。

津ハ休子。大平此御代也。能くわに吹て技を  
とぬる又冠辭考曰クハ海の所ある時ハ  
吹凡の吹ると時律凡と云なり

書麿集

衣山立右大臣

四方の海後志のりある御代也。凡ハ後赤の繫と云ふ海  
子載集也

崇徳院御製

吹凡と云ふ此技と云ふもこの山ハ一と云ふと云ふ  
御集

後柏宗院御製

技と云ふ吹春凡と云ふもこの山ハ一と云ふと云ふ  
拾遺集

前大僧正慈法

吹凡と云ふ此技と云ふもこの山ハ一と云ふと云ふ  
董仲錦云 大平之世 風不揺ナラサ條

王充論衡 大平之世 五日一風 十日一雨

風不鳴條 雨不破塊

東夷 西戎 南蠻 小狄 是ヲ四魔ノ夷ト申ス  
此大日本國ハいろく名ヲ略ス

と名付て申ふなり。此代より此代御子孫にて。今皇  
より百十七代の御代あり 將軍様と清和帝の

御子孫あり。天下と云ふなり。めと目出度御國也。是上

爾雅云 九夷八狄

七戎六蠻 謂之四海

金銀乃くまに五穀を饒はくあ民安振りて  
て又學子かかして武備はくましくさかりり  
六藝ののちにして神佛たにたのこめさ  
宮上の國なるに四夷より日本と競望とあらり  
東夷ハ蝦夷鴻あり人皇十二代景行天皇は代  
多を叛<sup>ム</sup>日本武尊あらりに責たつどもあふさる  
為彈の時武皇とこましくあぢあぢにあらり  
にのり武皇とよよと其後人皇五十七代桓武天皇  
の御代ハ蝦夷をひきつかば坂上田村丸奉勅<sup>ウケテ</sup>批

我<sup>ツカサ</sup>レの年りけ平均小治る<sup>けい平均御</sup>  
又本集

いふふとあつりてする皇<sup>ミヤ</sup>のあそにせと秋の勝  
るやんをさうら勢強國也又右のあれらこと  
いふのと草中へ吹けてつやふいふ術をりひを  
日本ハ武威ハ許順治<sup>ニ</sup>西戎より日本と責し  
事用開<sup>ニ</sup>のりあのかん流<sup>ニ</sup>七ヶ度小及つ<sup>けり別記</sup>  
大軍訖人全卅九卷下卷<sup>ニ</sup>毒アリ  
南蠻<sup>ニ</sup>南極<sup>ニ</sup>ナリ大發回也<sup>ニ</sup>  
三國志又文選<sup>ニ</sup>古文ホ  
出<sup>ル</sup>後出師表<sup>ニ</sup>諸葛亮



引記アリ

上略思惟北征シモフテ直先ヨロシク入南故五月渡瀨テ深ク  
入不毛アラス并日アラス而食臣非不自惜カラフシキ也下略

右の表に南蠻と云ふ毛と云ふハ毛ハ人ガめくハ  
毛髪ガり世界ガめくハ五穀草木ニ南蠻ガ契ガ  
故五穀草木ハ生國ニ故肉食斗めく言テ國ニ  
金銀もす別國也大惡國也日本と云ふは寸  
虫の大空めく守事ガり別記委アリ

聖仁天皇廿歳ニテ  
爲太子ト四十歳ニテ  
即位ニ在位九十九歳  
宝篋百四十歳

北狄ハつるに日ハ敵討セズ是所謂常盤國ニ  
又常世國トモ  
日本紀曰ク人皇十一代聖仁天皇九十年春二月庚子朔

天皇命田道間守遣常世國令求非時杵莫トキシクノカクコアミラ

萬葉集家持長歌トキシクノカクコアミ

非時杵莫シカシコクモノコシタマヘシ國モセニ生タナサカハ  
ナド讀リ同日本紀ニ常世ノ國則神仙秘區俗非所  
臻トアレハ常世ハ仙人住家ニテ蓬萊山ノ類ナルカ  
田道間守ハ其一往テ莫ヲ求テ日本ニカハルト也仲實  
ノ歌ニモ常世ヨリ杵莫ヲウシ植テ山郭公便ニ侍ツ

万葉集

常世のい橋のさくらふ家おほきハ今ところか

古今 傳記

續人志

つづらまの苑橋の香をかげの首の人の袖をかた  
那古身 史

時為苑橋の香びよめてあけの首の人やまつと  
史記本紀曰海中有三神山名曰蓬萊方丈瀛洲  
仙人居之史記正義漢書引其意曰此山激海ノ  
中ニアリ人ヲ去ルコト遠カラス蓋到者アル諸ノ仙人  
及ヒ不老不死ノ藥アル禽ケクモノコトク白ニ金銀ヲ  
以テ宮殿ヲ作ルトナリ蓬萊山ヲ和語ニ蓬ガ嶋トハ云

亦龜山ト云也

拾遺集

戒秀法師

海山に生糸のそるれはさむかこもふれ別と  
蓬萊山と巨の飛首とわけて載ト云説列子見  
たり 常世國常盤國史記ニ委アリ

あひふ桐生れ松と目ゆなかりたれ

拾遺集 右めいど

かゝるもの人非乃おまこととていへば信吉の非  
かた天下大平に治教徳成師代お父子有てまぬ  
しつちあゝ家の肥なるこ古今と云られ松とて  
目出度かりきれと云誠おひしある由更あり  
実におよこことと云ふもあつちかか師代おど先所  
民とて豊ある君のあそ有御とていへば  
実におほとや作とてことと云文直主の徳と教子  
乃候と云とて論語子罕第九 仰之弥高ト云

意あつて今聖徳の師代と候まあり言葉は  
以て云つらんにかゝおろり成事也。何を云  
にのがたこと今け師代お臣民とていへば  
若れめその有御とて又とていへばなるは候乃  
情あつて内にならるる女性外おむり  
又かゝ夫婦の和親等を弾つとて列とて大平

早稲  
信吉本  
松の目出度  
わ倍ゆ  
わここと一候子の候とていへばと云候と

ク北 信光本ニカサテアリ長俊本同

久草木心外ハハヤセウシ花実の時とたかきと  
陽春れ徳とと外ハて南枝花ハ先ハてしハく

又ハ致端祥ハとと改テ新ニハハ時ハ心  
字ハ花実時ハとたハとハ春ハ花咲ハ実の  
熟シすハと云 陽春の徳ハと外ハて南枝花ハめテ  
同クとハ陽春ハと外ハて南枝花ハめテ月ハと花ハ乃  
しハくハと云ハ花実時ハと外ハて南枝花ハめテ月ハと花ハ乃  
めテ一本ハ花ハにハくハと外ハて南枝花ハめテ月ハと花ハ乃  
本朝文粹第八卷ニアリ朗詠初卷ニアリ

干余殿文會ノ席ニ慶保胤ノ句

東岸西岸之柳遅速不同南枝北枝之梅閑落

已異ト 又事文類聚集薦舉門ニ 蘇麟

近水樓臺ハ先ハ得月向陽花木ハ易逢春ニ

時ハと外ハて南枝花ハ先ハてしハく  
小深ク

花ハと外ハて南枝花ハ先ハてしハく  
斗ハと外ハて南枝花ハ先ハてしハく

と云ふ意は、松の常盤の徳といふこと。先  
宋枯れる木の徳をわけて、松を又よりけ松はこ  
らり合して云筆古老なりと云ふこと、長の字  
と云く、不変れ美と云あり。花葉時とわくは、  
梅や桜のとり、花の咲け葉の落る時とわくは  
事勿く、四季にありとあり。一千年の文も、  
うらふ深さといふ春文のたより、木も松は、  
して枯木のうらふこと、いひに、け松は、  
る成歳を、そのわく、いひ、云々とたると、一千年

経ても、いふことあり

詠詠題、歳寒、知松、貞、源順

十八公ノ榮、霜ノ後、露一千年ノ色、雪ノ中、深  
題ノ意ハ、歳寒ヲ霜雪ノフル時松ノ貞本ナル事ハ  
シラレト云也。論語子罕第九曰、子曰歳寒、然後  
知松栢之後彫也。トアルモ同シ也。十八公トハ松  
字也。霜ノ後ニアラハルトハ、雪霜フリテ後也。寒ニ  
依テ貞シアラハス心ナリ。下ノ句松ハ子歳フルモノナレハ  
一子歳ノ色ト云也。千年ノ松アル事、王策記、嵩山記。

郭氏。玄中記。抱朴子。廣志等。見（メリ）

定家卿ノ家ニ

海の如く我らるるこゝの地れのまゝのなめし松をみせり

又ハ松苑の久十のつとむといふ

松苑十のつとむ事 藻塩本草竹葉のこに松ハ

子年小十回花咲くといふ

漢十歳

為藤卿

何者此松も後御代に遷て十のつとむれぬ為の事

郭後撰集

基後

松の花十のつとむる若くは何れもわらふ松のよみ  
か終たのりと松のえのこし葉のまの路のま心と  
足か柱とありて

か終こいぬい便とと字書に便ハ宜也安ありと  
信て信云勝もいぬ也。是よりとろく松の松  
外も事と云ぬく。聖代ハ万物皆を成とほて各  
其性ととらふ。みれ十雨と西風も順ちれハ水得  
此の痛も如くおのつとむる松のま此ある







にうたふ秋の虫乃や露に鳴し皆是れ木の音の辨く  
され有信此情をのたま声皆ありとらいつるあ  
の五句と五句ふかこる人あり

古今席略上花小句言水にすじ蛙のたまとよげば  
いれういまるものいつきりあはよるこる

同古今有真名席略上若夫春鶯之轉トリ花中トシ秋之蟬之  
吟スル樹上トシ雖無曲折ラク各發シテ歌謡カ物皆有之自然之  
理也

草木土河川声水各違一万物のこり分りり春乃

木の東凡ふうこる秋の虫れや露にのりとも皆木の  
音ありとら

東トシ布トシちかきとられうてあつらとらとら

目小んぬ尾神とらとらまこかりせつ方とらかの申  
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら

なかりとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら  
とらとら東陽とらとらとらとらとらとらとらとらとらとら

とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら  
皆木の音ありとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら  
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら



天子五祀  
天地四方  
山川

又とつとふ夏のまわりとなりと

始皇れ御壽におのの御経の本ゆりこて吳國ゆり  
幸朝ゆり可氏乞と貴殿と

史記本記又事文類聚前集十三卷七出松小壽

位わの事と云ふ泰始皇上泰山祿と凡兩景

至休於樹下封其樹得五松封為五太丈

ちゆの尾の鐘乃多んゆり曉りけておのわけり  
松り枝れ葉多い日一深みより立よるかけの鈴夕ふ  
かけを落葉れつとせぬい後ゆり松の葉乃散失んそ

又ハ終正本れかつらうれ世のたふ成るるといは  
れ申ゆり名らるゆの未代れゆめゆりお生乃松  
と月ゆ度とい

子載集

前中納言尾席

ちゆの尾の鐘の多んゆりわつとつとつておの  
童蒙抄ゆりゆりゆりに豊山と云ふる去冬小鐘ち  
おの路とゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
豊山有九鐘焉是知我鳴郭璞注云霜降則  
鐘鳴故言知之物有自然感應而不可為也ト云

言砂の尾とけ鐘と  
豊山鐘の所て後しと

前中書王

前中書王

夜月似秋霜

所名

欲和豊山領鐘聲否其奈葉亭鶴敬言何

詩心ハ月光ハ霜ニ似タレ此霜ハ豊山ノ鐘ニハ

和スヤ不和ヤト云也下ノ句月光ノ霜ニハ華亭ノ

鶴聲ハ敬言メヤスレイカ有ト也或説

百詠註云千年鶴霜降則飲声不鳴トアリ

故敬言ト云 韻瑞續搜神記東城門有華

表柱百鶴集其上言詩曰有鳥有鳥丁令威

去家三十年今來歸城郭如故人民非何不

學仙塚壘々々々

言砂の尾上乃かこの前中納言匡房の所ハ尾との鐘

と豊山に鐘によとてよめ俗に云ハ言砂松小宮の

わくこひひげ松を常盤木ぬふおめおをれと

葉ふみは青みそりぬ又言砂の鐘ハおね乃鐘

をよむに多のよるよ松ハ前りて物ヲみよる

落葉とわらわつめてもそね受あひすこり後

ありこい古なり此席松の葉れ教らせんしてはる

そのうらみは、はらうりともあり、實と御あり  
こと、心木れうり、木わか事日、其葉死実た、  
まゆまは、只其かつ、志長、皮の内み糸  
も、ゆめは、ごう、僕若お、知、元杜仲トナツの、別種、  
危、まゆま、ごう、蔓生マユマと、まゆま、ごう、  
ほ、一物の、ごう、お借、ま、ごう、ごう、地河、ごう、  
あり、ご

後撰集 雜言

和歌た、史、居、融、云

照月テリツキと、心木、乃、つ、ぬ、な、ごう、ひ、て、わ、た、り、ごう、人、ごう、ごう、  
、

上三巻

實ミ者ノと、ろ、く、松、の、枝、の、く、老、木、れ、首、の、り、り、て  
其、る、は、ら、ごう、ごう、ごう、

是、大、海、文、婦、容、貌コウホウイキ威、儀、と、ん、ごう、た、り、の、ごう、  
わ、ごう、ごう、本、成、男、の、喜、ぶ、性、と、病、ごう、あり

<sup>二六</sup>今、を、何、ごう、ごう、つ、む、ごう、ごう、是、は、言、何、ごう、の、え、れ、お、ま、れ、松  
け、情、又、ゆ、ごう、現、ごう、あり、ごう

又、海、文、は、ごう、ごう、松、れ、精、ごう、ごう、る、ごう、わ、た、り、あり

又、本、草、綱、目、曰、ごう、子、年、松、樹、四、邊、枝、起、上、抄、不、長  
也、疆アキ蓋フキ、其、精、化、ごう、為、久、其、壽、千、歳、ごう、ごう、此、等、ノ、説、

因

盛衰記十二卷  
六丁師長熱田  
社琵琶事

付テ製作シタルモノナルヘシ。非惜愛<sup>スル</sup>有情不  
可疑<sup>ラ</sup>物妙極<sup>ニ</sup>則自然<sup>ニ</sup>催感<sup>ス</sup>是天道<sup>ニ</sup>常也<sup>ニ</sup>。  
天竺<sup>ニ</sup>黄金精化<sup>メ</sup>成<sup>テ</sup>五百騎<sup>ト</sup>與<sup>ニ</sup>穀賊<sup>ニ</sup>語<sup>ス</sup>出<sup>ッ</sup>佛說  
譬喻<sup>經</sup>。震旦<sup>ニ</sup>虎丘山<sup>ニ</sup>金精上<sup>ニ</sup>為<sup>ル</sup>百虎<sup>ト</sup>曰<sup>ク</sup>山  
虎丘<sup>ト</sup>ナツク<sup>ニ</sup>事<sup>ニ</sup>文類聚<sup>ニ</sup>第<sup>ニ</sup>辛卷<sup>ニ</sup>引<sup>ク</sup>之<sup>ニ</sup>亦橋<sup>ヲ</sup>欄<sup>テ</sup>石<sup>ニ</sup>化<sup>メ</sup>成<sup>テ</sup>童  
子<sup>ト</sup>夜々<sup>ク</sup>出<sup>ル</sup>見<sup>ル</sup>梧<sup>ノ</sup>果<sup>志</sup>和國<sup>ニ</sup>亦此類<sup>ニ</sup>不少<sup>ク</sup>琵琶  
精化<sup>メ</sup>成<sup>テ</sup>人<sup>ト</sup>出<sup>ル</sup>盛衰記<sup>ニ</sup>十二卷<sup>ニ</sup>出<sup>ル</sup>大根化<sup>メ</sup>成<sup>テ</sup>人<sup>ト</sup>出<sup>ル</sup>  
徒然草<sup>ニ</sup>凡<sup>ソ</sup>草木之精<sup>ノ</sup>之变化<sup>ス</sup>諸文甚廣<sup>ク</sup>玄中記<sup>ニ</sup>  
云<sup>ク</sup>百歲之樹<sup>ニ</sup>其汁<sup>ニ</sup>赤如血<sup>ニ</sup>千歲之樹<sup>ニ</sup>精<sup>ニ</sup>為<sup>ル</sup>青羊<sup>ト</sup>

萬歲之樹<sup>ニ</sup>為<sup>ル</sup>牛<sup>ト</sup>

法苑珠林<sup>ノ</sup>引<sup>ク</sup>之<sup>ニ</sup>  
卅七卷<sup>ニ</sup>終<sup>ニ</sup>

芭蕉<sup>ノ</sup>精<sup>ニ</sup>為<sup>ル</sup>女<sup>ト</sup>

湘海新傳<sup>ニ</sup>出<sup>ル</sup>  
又康已編<sup>ニ</sup>七出<sup>ル</sup>

地 婦<sup>ト</sup>江<sup>ノ</sup>ぬち名<sup>ニ</sup>西<sup>ノ</sup>乃<sup>ニ</sup>松<sup>ノ</sup>の音<sup>ノ</sup>珍<sup>ト</sup>とわ<sup>リ</sup>りて

元 信光本<sup>ニ</sup>カニテ<sup>リ</sup>ウ<sup>リ</sup>ウ<sup>リ</sup>ウ<sup>リ</sup>ウ<sup>リ</sup>トアリ<sup>ニ</sup> 異本<sup>ニ</sup>同<sup>ク</sup> 賢<sup>ト</sup>も代<sup>ト</sup>とて<sup>ニ</sup>出<sup>ル</sup>も本<sup>ト</sup>

我<sup>レ</sup>大<sup>ニ</sup>君<sup>ノ</sup>の國<sup>ヲ</sup>もこ<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>送<sup>ス</sup>も<sup>ハ</sup>忘<sup>ル</sup>代<sup>ト</sup>も<sup>ハ</sup>恒<sup>ク</sup>音<sup>ト</sup>も<sup>ハ</sup>あ<sup>リ</sup>  
行<sup>テ</sup>あ<sup>レ</sup>め<sup>テ</sup>詩<sup>ヲ</sup>や<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>じ<sup>ト</sup>タ<sup>ハ</sup>海<sup>ノ</sup>の<sup>ト</sup>汀<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>る<sup>海<sup>ニ</sup>は</sup>此<sup>レ</sup>  
小船<sup>ニ</sup>に<sup>テ</sup>う<sup>ラ</sup>ま<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>追<sup>フ</sup>風<sup>ノ</sup>も<sup>ハ</sup>海<sup>ノ</sup>り<sup>と</sup>つ<sup>ハ</sup>伸<sup>ル</sup>乃<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>  
物<sup>ト</sup>に<sup>テ</sup>ま<sup>ハ</sup>り<sup>や</sup>〜

聖代の記<sup>ニ</sup>お<sup>も</sup>り<sup>て</sup>か<sup>ハ</sup>め<sup>ル</sup>各<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>と<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>る<sup>中<sup>ニ</sup>と</sup>ん

神社考又古今席位より

紀友雄

おもしろい我人若れ國なれいつく冠のすこり物  
けり河さかりてちりつる遠き思ひ代よはすこり  
とまげのちりつる

海士の小松の支 檣カ加古郡長田村より三町坤未申

の方燭ホ中ふちるる長五尺四寸幅二尺四寸、徑首ハ

天ノ若松とちりつる。迎世ハ天ノ小松と云。峯相記云

日向大明神加古郡北条ノ郷 大野村 養元九年彼國より若

松ふのり。容貌美麻の女神、伯母多る百具、加古乃

浦ふ若松と云。け後ふれハ自由明神の意、若松

と云。西の人乃中平也。信昔明神の記、以後の文

句めくハ若松と云。只江ふ有後又乃松と

同也。武日神代卷蛸蛸子の言と云。天の若樟ツクス記にのせ

て風のよふハをかりよハと云。樟ツクス木はよく能く

能く記あり。官ね天のこ云。若樟松と云ハ賢國の義

と云。中平の若松ハかたたきあり。若松は能く能く

能く能く武日武日石や若松と云。若松と云ハ若松

ありとする事。元々ハ神代奇怪ハはらうんハふ

と申にその石、非道ふ一鐘れ言候あり、丹後  
天の橋立あり、け橋と神代小謡冊ナナナヒの二言、  
天の浮橋大と云ふと唐と、今の丹後の天れ  
はととありぬ、中傳ふ浮橋ハ遠化臨陽の  
ひらわりの中、ゆるわれ、何と飛脚あり、  
唐と云ふと、実と云ふと、古と云ふと、  
名付て浮橋のち、つりと、後世と、つり  
と、あつる、あつる、と、と、と、と、  
と、と、と、と、と、と、と、と、と、  
と、と、と、と、と、と、と、と、と、

ため、たれ、一、浮橋の天れ、若く、  
から、天れ、若く、と、天と、事、  
と、と、と、と、と、と、と、と、と、

高砂鐘、長、三尺、寸、周曲、七尺、七寸、厚、  
を、寸、九分、徑、式、尺、四寸、分、釋迦、坐像、二軀、笙  
甯、築、笛、等、樂器、此、圖、及、方、四寸、蓮、華、三十  
六、座、有、花、蒂、悉、く、為、て、疤、痕、僅、小、鐘、釵  
竹、筒、八寸、上、に、蒲、半、此、形、を、作、り、  
華、鐘、籙、音、數、里、小、徹、と、故、ふ、明、石、  
揖、保、の、藩



江列 王井寺の  
傍に大木小都  
ありりりりりりり  
いんくんと

この海とひんぎれあつこい昔て海賊のため  
にあつて去泥の浦足指れ崎とつりかちり  
怪異のりて言砂(る)又別本長治三本城より  
一十二時を撞(フケ)別本家とて後(フキ)本(小)海ると  
やけ撞(あ)海(こ)世(に)ある(り)ぬ(た)正史實録  
ふら未考得け撞(あ)樽(遷)れぬ(た)天知貞字  
年中の比と大(小)都(有)て(庭)と(り)入(る)ふ(い)り(り)ぬ  
し(が)の(こ)血(ぬ)る(の)形(と)ふ(月)志(ら)つ(り)共(都)  
瘡(イ)て(り)の(と)ら(い)遠(の)海(濱)と(御)名(灘)と(ら)り

いんぎれあつこい昔て海賊のため

大ん家集 花女

其(他)又(本)集(花)林(油)中(抄)ふ(ち)ん(物)ま(た)撞(と)む(す)  
る(る)号(と)ふ(お)ん(今)言(砂)の(社)ふ(り)と(つ)ぬ(す)  
首(の)神(河)小(鐘)ハ(あ)つ(り)と(あり)あ(よ)に(け)遠(い)ふ  
つ(と)も(精)舎(有)あ(の)今(考)一(地)を(う)つ(た)

言(砂)は(浦)弘(に)帆(と)あ(を)て(し)月(伝)た(ふ)物(海)の  
波(乃)流(路)れ(鳴)け(む)き(う)あ(る)た(の)神(さ)ら(ん)も  
ほ(れ)え(ふ)る(よ)き(り)り

本城言何より信者いふ信託路の体あり彼の  
信託といはれしはけきくめく云くけり信  
詠詠といふ信託れを云といふ始の道は路  
あり申入る信託にこそ是又同の信託路の乃  
信託かこつたに信託の事是と信者れこ件  
ふかこつたこと離火れ火こそ水と信者火志  
けめの信託あり 始の乃信妻岡男申入  
申南男いふ乃信 夜岡男是秘信ありと云  
我々もくもく成の信者れ信の信託い世は

めいしてこそいふもあつたもけりたの久  
と申すは信の報乃拍子と揃てぞ  
ちめい信託いこり

古く集巻第一七

讀人あは

け本 秘事也  
引記アリ

信者いふひりりり  
け前信者いふ百七信は信者いふ信者い  
信者いふひりりり

細川玄旨信託

文徳天皇の天安元年か信者いふ信者いふ  
實録めいんと信者いふ信者いふ信者い





律条不唐本ニアリテノ云レタリ長俊本同

春なれや海のなれ物かびたまもかたある  
春かけの

春の妙名と信者れる宗朝香深ふよき

板か古指あふいらり海のなれ物かた

言物とせし信者にきりての事

漢は撰采

抄本を信者

堤三位信能

信者れあまの酒れみどり

芳葉集

抄本朝香

わさつはゆけりのあまふらり

たふとがるあるなかけと信者の宗文と云あり

玉藻とハ藻の信ハふらり

ふらりハむらあはれ

かたきさむらあはれあまのうてかむらあはれが垣

松根ふらりて腰ととれハ地ふらり

梅花ととれかハふらり地二月の春夜にれり

子日席橋ハ在列

文粹第十一春日野遊ト題也

倚松根而摩腰ス十年之翠満テ折梅花ハ而

挿頭ハ二月之雪落衣ニ

右上句ハ松ハ万木ノ中カニハヒトリ貞木ニシテ風霜

ニモオカサレズ其色常盤ナリニカハル貞木ナレハ  
是ニタツサハリテ其常盤真心ナル事ヲナラフ  
ト云也。摩腰トハフレタツサハリテノ心也。十年ノ  
エトリノ干ニ満トハ松ヲ折若ハヒキテノ干ニセツニ  
千歳トセニトリ堂タテマロアリト云ナリ。下句ノ意ハ梅ノ  
枝ヲ折テカザセハ花ノ散カハルガ二月ノ雲ノ袖  
ニフリカハル心地也ト云ナリ。在列アリラフガ法名尊敬ト云  
延曆寺ニ住ト云 朗詠ニモ此句ヲ出セリ  
或云日子ヲ日遊ハ昔ハ正月初ノ子ノ月シカルヘキ

人々ハ野辺ニ出テ小松ヲヒキテ十年ヲ経ヘキ由  
ノ祝ヒヲスル事也

万葉集

幼春のゆ子のきふれお帯りひるかたゆりくま法  
是ハ家持ノ歌也。けむ帯トハ春ト云ふも子ノ日  
の小松とゆりくえさく帯みゆりて田舎の家ムツキに正月  
此ゆ子の日こがしむる家と帯ゆる変と顯照ノ  
袖中抄小尻より。公事根源あり昔ハくくむま  
ゆり子の日むらむらく松とゆりたる。 朱雀院

園融院 王條院ふくの御時にとけ御也との  
のるあるあや申めと融院の子れ日とせはひ  
せるハ寛平元年二月十三日申す二月の子日と  
人皆わもまごつと首ハ正月よふ浪とんより  
夫本集ふめと二月の子日、あんとより

拾遺集

大中臣能宣

「の年まごつかれる松もまぶよりいふたひつれて  
御古今 清正

「この日まごつかれる松の娘や松ひつとちち代の乳と  
つり代とせふふおくといひませるお子の松れ末とらる

長秋詠草

倭成卿

董勳問答七初學記七曰、歳首折松枝男ハ  
七枝女ハ二枝コレ以テ爲藥ト見エタリ、是七子ノ日ノ  
松ニ似タリ、サレハ松ノ徳シイハ、抱朴子ニハ松ノ歳ヲ  
經ルト云、僱佺ト云ル仙人常ニ好ニテ松ノ實ヲ  
食フ、鱧ノ毛數寸能ク飛ブト走ル馬ノ如シ、其  
後松子ヲ以テ堯王ニ遺ル堯王不受、時ニウケテ  
コレヲ食フ者ハ壽三百歳ニ至ルト、列仙傳ニ見タリ

高山ニ松アリ。或ハ百歳或ハ千歳。其精變化  
シテ青牛トナリ。伏龜トナル。採テツノ實ヲ食ス  
ンハ長生ヲ得ルト高山記ニアリ

有<sup>上座</sup>龜<sup>上座</sup>此<sup>上座</sup>乃<sup>上座</sup>神遊<sup>上座</sup>の御教<sup>上座</sup>を  
洋<sup>上座</sup>し<sup>上座</sup>あ<sup>上座</sup>つ<sup>上座</sup>た<sup>上座</sup>よ

教有<sup>ト</sup>法花經<sup>ト</sup>文珠師<sup>ト</sup>自佛<sup>ト</sup>言<sup>ト</sup>世尊<sup>ト</sup>是<sup>ト</sup>諸善  
薩<sup>ト</sup>甚<sup>ト</sup>為<sup>ト</sup>難<sup>ト</sup>有<sup>ト</sup>

月信<sup>ト</sup>者<sup>ト</sup>の神<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>の御教<sup>ト</sup>を洋<sup>ト</sup>し<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>つ<sup>ト</sup>た<sup>ト</sup>よ<sup>ト</sup>月<sup>ト</sup>信<sup>ト</sup>  
よ<sup>ト</sup>ひ<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>云<sup>ト</sup>け<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>表<sup>ト</sup>向<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>れ<sup>ト</sup>た<sup>ト</sup>神<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>出<sup>ト</sup>現<sup>ト</sup>ね<sup>ト</sup>し<sup>ト</sup>よ<sup>ト</sup>ひ<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>

郭<sup>ト</sup>在<sup>ト</sup>今<sup>ト</sup>

西<sup>ト</sup>河<sup>ト</sup>法<sup>ト</sup>師<sup>ト</sup>

神<sup>ト</sup>信<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>御<sup>ト</sup>教<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>洋<sup>ト</sup>し<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>つ<sup>ト</sup>た<sup>ト</sup>よ<sup>ト</sup>月<sup>ト</sup>信<sup>ト</sup>  
神<sup>ト</sup>曰<sup>ト</sup>是<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>御<sup>ト</sup>教<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>洋<sup>ト</sup>し<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>つ<sup>ト</sup>た<sup>ト</sup>よ<sup>ト</sup>月<sup>ト</sup>信<sup>ト</sup>  
後<sup>ト</sup>拾<sup>ト</sup>遺<sup>ト</sup>集<sup>ト</sup> 康<sup>ト</sup>資<sup>ト</sup>王<sup>ト</sup>母<sup>ト</sup>

わ<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>山<sup>ト</sup>屋<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>雲<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>源<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>常<sup>ト</sup>に<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup>し<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>つ<sup>ト</sup>た<sup>ト</sup>よ<sup>ト</sup>月<sup>ト</sup>信<sup>ト</sup>  
是<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>御<sup>ト</sup>教<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>洋<sup>ト</sup>し<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>つ<sup>ト</sup>た<sup>ト</sup>よ<sup>ト</sup>月<sup>ト</sup>信<sup>ト</sup>

壽<sup>ト</sup>量<sup>ト</sup>品<sup>ト</sup>佛<sup>ト</sup>壽<sup>ト</sup>命<sup>ト</sup>長<sup>ト</sup>遠<sup>ト</sup>ナル<sup>ト</sup>説<sup>ト</sup>法<sup>ト</sup>華<sup>ト</sup>經<sup>ト</sup>云<sup>ト</sup>其<sup>ト</sup>中<sup>ト</sup>文<sup>ト</sup>  
於<sup>ト</sup>阿<sup>ト</sup>僧<sup>ト</sup>祇<sup>ト</sup>劫<sup>ト</sup>常<sup>ト</sup>在<sup>ト</sup>靈<sup>ト</sup>鷲<sup>ト</sup>山<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>わ<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>是<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>説<sup>ト</sup>く<sup>ト</sup>  
東<sup>ト</sup>著<sup>ト</sup>聞<sup>ト</sup>集<sup>ト</sup>云<sup>ト</sup> 大<sup>ト</sup>二<sup>ト</sup>條<sup>ト</sup>殿<sup>ト</sup>小<sup>ト</sup>式<sup>ト</sup>ア<sup>ト</sup>内<sup>ト</sup>侍<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>



月いふゆかりいしるるをききしに武門  
の下ふ。いとむかしはあはれいかにいふに  
又よ今夜あはれしに武門いふとあはれ  
昔の夜あはれしとちとあはれ  
紅葉指の月指のこころあはれしに武門の月  
ふいふとち

徳園去集  
中誓のち

いふゆかりいしるるをききしに武門  
東の集

月夜ふいふ人あはれしに武門  
右のちあはれしに武門いふとあはれしに  
実とあはれしに武門いふとあはれしに  
かげしに武門いふとあはれしに

舞のえれ松と河のこころあはれしに  
こころあはれしに武門いふとあはれしに  
波このえれ。青海波は遠海淵のふし。  
日け舞れあはれしに武門いふとあはれしに



ねまののひめを尾を押して、ちねいあれこ石  
これの侍豆吉仲綱其付い未だ人あたはゆるり  
指ゆりゆるふ。是の何と云ふれらんゆき  
ふり、布衣の袖より雲後て、御念所の前にゆく。  
人あたまこ呼れい小舎人あがり、乞賜し  
くめし松よきし差おたれい一目らんきあゆて  
あけゆりの節等者に賜ふたれい不忘蛇の以て  
大踏ふゆり手振て控られい蛇即死りり。翌日小  
小松殿自身めり師文を。此の師振舞還城不

とまらんゆき、雅異辨作一正一振令送進いそそ  
まゆる、あまの馬の七尺ふゆきを、送ふ白雲輪  
の鞍をきて、厚席の鞆とかけ、太力の長伏輪  
ゆるい、錦の袋に入りまゆり、ふゆきを  
ゆるい、仲綱活返事小、師劔師馬謹拜領師芳  
巻く至、殊良入作、押去夜城、還城衆のい  
は作さ、仲綱頓首謹言と書りゆきり、還城衆  
こい蛇を返さぬれい、角向答るるゆきと、下略

ねまのの 小島文

小忌の衣、御事服也。花鳥餘情、日、十一月中、卯日  
新嘗會、辰日、豊明節會、小、山藍、小、てすもる  
小忌、よ、よ、よ、と、よ、よ、よ、也、一代、小、一度、の大嘗會、に、  
か、の、し、ら、

小忌衣、變、過、考、源氏物語抄

袴抄、曰、平治、或、秘記、曰、小忌、事、其體、如、缺、腋、但  
身、一、幅、也、用、狩、衣、寸、法、但、前、尾、如、缺、腋、白、布、シ、  
粉、張、ニ、シ、テ、摺、之、後、登、也、無、裏、單、也、摺、樣、形、木、ノ、文、  
小、草、梅、柳、水、蕨、鴉、蝶、小、鳥、以、山、藍、摺、之、頭、紙、

蝶、小、鳥、小、草、計、摺、之、身、後、蝶、五、摺、之、或、三、つ  
同、前、ニ、三、つ、蝶、摺、之、別、圖、アリ、無、山、藍、時、用、夾、タ、ノ  
目、波、志、木、

或、去、赤、紐、濃、步、長、一、丈、四、五、尺、計、ナル、帛、シ、三、筋  
組、合、マ、二、つ、折、テ、前、後、垂、蕨、芳、テ、又、同、二、つ  
ナ、ラ、付、ル、ナ、リ、鳥、蝶、十、ト、畫、也

袖、紙、捻、兩、方、付、袍、上、テ、カ、ク、ル

又、山、藍、と、云、ふ、法、淨、の、系、を、比、大、嘗、會、の、節、此、節、  
繪、淺、ら、む、る、は、し、草、摺、等、々、奥、より、お、る、と、云、ふ

日  
さかかいはふり悪魔とてうひださひるひにち  
あふるといふ

祭礼ノ御先  
立給神

壬午ノ尊降臨  
時ノ吉也

道祖神ハ門出ノ神也亦悪魔拂ノ神也大田命  
猿田彦命ノ異名也御鎮座傳記曰吾復生氣  
ノ爲ニ壽福ヲ授興故ニ大田ノ命ト名ヅク  
神代卷曰己ニシテ且降之間ニ先駈ノ者カエリ  
テマウサクニ神アリ天八達之衢ニ居リ其鼻ノ長  
七咫背ノ長七尺アマリマサニ七尋ト云ヘシ且口尻  
明耀眼ハ八咫鏡ノ如ニシテ赫然コト赤酸醬ニ

似レリ郎從神ヲ遣シテ往テ問シム時ニ八十萬神  
夕子皆目勝テ相問コトヲエス故時ニ天鈿女ニ敕シ  
テ曰汝ハ是人ニ目勝ル者ナリヨロシク往テ問ヘシ  
天鈿女乃其胸乳ヲアラハニカキタテ裳衣帶ヲ臍ノ  
下ニ柳笑嚙向立是時ニ衢神問曰天鈿女汝カク  
スルコトハ何ノ故ゾヤ對曰天照大神ノ子所幸道路ニ  
カリ居コトアルハ誰ソヤ敢テ問衢神對曰天照大神  
ノ子今當降行ト聞タテマウル故迎奉テ相待吾  
名ハ是猿田彦大神時ニ天鈿女復問テ曰汝マサニ

我ニ先夕子テ行シヤ將抑我汝ニ先夕子テ行シヤ對曰  
吾サキ夕子テ啓行ニ天鈿女復問テ曰汝ハ何處ニ到  
マサヤ皇孫何處ニ到マサヤ對曰天神ノ子ハ則チ  
筑紫日向高十穗穗觸之峯ニ到マスヘシ吾ハ則チ伊勢  
之使長田五十鈴川上ニ到ヘシ云云

按ニ此神裔大田命祖神ナリ受傳テ日ノ神ノ宮所ヲ  
守リツイニ人皇十一代垂仁天皇ノ御宇ニ倭姫命ニ逢  
奉テ日ノ神ノ宮所ヲ五十鈴ノ川上ニ導給フ此事  
御鎮座傳記倭姫ノ世記等ニ詳ナリ是皆猿田彦ノ

神ノ神徳ニヨレルモノナリ今諸社多ク祭禮  
神幸ノ先ニ王ノ鼻トテ鼻高ノ面ヲ渡御  
アル事此神ヲ祭ナリ是道祖神ニシテ導  
ノ故ナリ

新古今

紀泚望

久かこのあめいそむらけしりしをとれしん  
と腕あひつゝのこみ舞曲の形容ごらんかひを  
ぬねふ申八相うし八方淑うし中故に忠魔と拂ぬ  
けりほつゝのこみ腹かひを一方ハ有命と

心膈ふおさじ一方と福あり。令ら七寶の宮上  
あり肺臓ハ令ごとれ故に日なれ肺花(納  
じりあり

子杖樂ハ民と分て

撫 バ  
ヤス  
ナ  
サ  
ス  
ル  
メ  
モ  
フ

宋説紀聞曰、益涉涸此曲、漢文帝の作あり、  
民百姓の田を作りて、秋に獲る取に、子杖樂  
民と撫といふ。撫といハ抚育とつて、たてあはるるこ  
王維詩、萬歳千秋奉聖君

萬歳樂ふら余とのふ

万歳樂ハ平潤の曲、隋煬帝此作あり。又曰、か  
用明天皇改作、流ふこ根原あり。万歳  
命とのあるふ海らぬふり、とあり

朗詠集

嘉辰今日歡無極、萬歳千秋樂未央

相生れ松風颯々の聲と樂と、じり

け西抄口傳あり

梵字心  
桐火桶ニ云ク  
まづ地をこころつと  
ふみつとこあり

此一卷引出<sup>ス</sup>書目錄

雍州府志 後撰集 定家辭案抄 易經 神代卷  
助語辭 日本記<sup>部</sup> 子載集 新古今 古今  
藻塩草 花山院記 蒙衣 拾遺集 後拾遺集  
袖中抄 采雅古今 奧義抄 字彙 小補韻會  
淮南子 王克論衡 故老傳 歌林良枝 夫木集  
續後拾遺集 新後撰集 風雅七秋 歌論義 禮記  
吳竹集 方葉集 神代抄 拾遺物語 中庸 論語



孟子 老子經 新撰下學集 拾玉集 爾雅  
三國志 古文 文選 伊勢物語 事文類聚  
本朝文粹 朗詠集 高山記 太平記 古今真名扁  
史記 本草綱目 盛衰記 神社考 玄旨法印注  
寶錄 國史 詞花集 長秋詠草 董勳問答  
初學記 法華經 樂說紀聞 箒抄 桐火桶

右六十六條



